《追憶シリーズ》〝わが学院の歩みの中から〟

校祖　ホーイ先生の生涯（A）

花輪庄三郎

押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーの三先生は、東北学院三校祖として後代から尊敬をうけていることは周知の通りである。この三校祖のうち、押川・シュネーダーの両先生については語られる場合が多いが、ホーイ先生については、割合知られていないかのように思われる。しかし、押川先生の東北学院創立の偉業も、もし、ホーイ先生の協力がなかったならば或はおぼつかなかったのではあるまいか。

ホーイ先生は、安政五年（一八五八）、米国ペンシルバニヤ州ミッフリンバーグに生れた。家は農業を営んでいたが、両親ともに敬虔なキリスト教信者であった。八才のとき母を失ったが、その臨終に際し、その子ホーイを神にささげる誓いをたてたとのことである。

明治十一年（一八七一）二十才の時、マーサスバーグ、カレッジに入学、そこで著名な教育家ヒグビー博士の感化をうけて、先生の全生涯が一変する契機となったと伝えられる。翌年、ペンシルバニヤ州ランキャスター市のフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジに転校、ここで生来の活動的性格と詩人的技量とを発揮して、大いに天分を認められたという。

更に明治十五年（一八八二）二十六才の時、ランキャスター市のリフォームド教会神学校に入学、三年間在学中ここで金子謹造という日本人の留学生と相知る奇縁を得た。ホーイ先生が東洋（日本）伝道を志す第一の芽生えはここにあった。金子謹造は前後八年間もここに止まり旧約聖書の研究を続け、後に東北学院神学部教授になる筈であったが、日本帰国まぎわに肺患のため惜しくも病死した。友人達はその死をいたみ、彼を記念するためその蔵書と拠金を日本に送って来た。東北学院労働会金子記念印刷所設置の礎石はかくて据えられたのであった。

同十八年（一八八五）ホーイ先生は二十九才で前記神学校を卒業たまたま合衆国リフォームド教会では、日本派遣宣教師（一名）の募集をしていたので、勇躍して応募したところ、外国伝道本局は非常な好意をもって彼を迎えてくれた。なお先生が日本に向って出発するにさきだち、神学校の恩師の一人であるデー・ジー・アップル博士は、先生にすすめて日本到着後は直ちにカレッジ並びに神学校を創設せよと勧告するのであった。この助言こそ東北学院創立の覚悟を固めさせる基となったもので、太平洋航海中もひたすらこのことにおもいを凝らすのであった。

そもそも合衆国（ジャーマン）リホームド教会が日本宣教事業を開始し、最初の宣教師A・D・グリングを派遣したのは同十二年（一八七九）であり、続いて第二宣教師J・P・モールの来朝は同十六年（一八八三）であった。ホーイ先生は第三番目の宣教師であったのである。

ホーイ先生は、同十八年米国を出発し、十二月一日横浜上陸、ただちにグリングの許に旅装を解いた。

さて、合衆国（ジャーマン）リフォームド教会の日本宣教開始は他の教派のそれにくらべてすでにおくれをとっていたので、日本における未開拓の伝道地域獲得には最初からあせらざるを得なかった。しかるに、最初派遣のグリングは、その性格上直接的な伝道活動には不向きで、日本語の勉強、キリスト教書の翻訳等、つまり伝道の準備のための机上の仕事に三年有余の年月をかけているありさまに業（ごう）を煮やしたミッション・ボードでは、実地伝道に邁進すべき使命を与えて第二番目の宣教師J・P・モールを派遣したのであった。モール師は、来日（明一六、一八八三）早々、グリングをせきたてて直接伝道に着手し、東京を中心にその周辺の埼玉地方に布陣を張り、その翌年早くも東京日本橋に「元大工町教会」（同教派日本最初の教会）を組織したので、ここに望みを得た米国ミッション・ボードは、ますますその教勢強化のために更にその翌年、第三番目の宣教師ホーイを派遣したのであった。

折も折、豪勇と雄弁と無教派主義の伝道者として知られた押川方義先生が、その計画中の事業の協力者たるべき宣教師を求めて上京中であったが、はしなくも、恩師のバラ邸で新来の宣教師ホーイ先生の紹介をうけたのであった。この両先生の邂逅（かいこう）こそは東北学院創立の機運の第一の起点であった。

元来、押川先生は四国松山城下の生まれで、青年期の横浜遊学中、米国宣教師J・H・バラ及びS・Rブラオンの感化をうけてキリスト教伝道の志をたて、北越地方伝道を手はじめに続いて東北地方の開拓伝道に転進し、仙台を拠点に独力を揮って縦横無尽、五年の後東北地方一円における成果をあげて初めて宮城中会を組織し、従来の無教派主義から一転して同十八年十一月日本基督教会に合同し、これと同時に直接伝道から教育を通じての伝道事業を発起し、そのため協力者たるべき有為の宣教師を求めてその助言を得るために、かつての恩師たるバラ先生の許を訪ねたのであった。

前記のようにホーイ先生の胸中には、教育伝道の望みはきざしてはいたが、具体的な計画は何もなく、まして関東以北の地に関しては全く未知に属していた。ただし土佐の高知は早くより長老教会の伝道が始められ、宣教師のフルベッキ、タムソンなどが伝道を開始していたので、ホーイも高知に対する淡い憧れを感じていたくらいに過ぎなかった。（つづく）

明治十二年（一八七九）	押川方義、東北進出の志を起し、米沢、山形を視察。
明治十三年（一八八〇）	押川方義仙台に移る。時に三十才
明治十四年（一八八一）	押川方義「仙台教会」を創立。
明治十八年（一八八五）	仙台、石巻、古川、岩沼の四教会を日本基督教会に合同し「宮城中会」を建設し、押川、中会長となるW・E・ホーイ来朝。押川とホーイは宣教師バラの宅にて初めて会見し、互に共鳴した。
明治十九年（一八八六）	押川方義、ホーイの協力を得て「仙台神学校」を創立

来朝当時のホーイ先生

年表で見る　東北学院昭和史（一）

年次	事項
大正十五年（十二月改元）	○「東北学院日本基督教会」建設式を挙ぐ。（二月五日）
昭和元年（一九二六）	商科卒業者に実業学校教員無試験検定取扱認可。（四月） ○南六軒丁専門部校舎建築落成九月より使用。 ○創立四十周年記念式並に専門部校舎落成式を挙行。（十月十六日）
昭和二年（一九二七）	伊藤嘉吉「労働会寄宿舎」々監蒔田寿副舎監となる。（一月） ○笹尾粂太郎東北学院神学部教授を辞す。（明治学院高等学部長就任）（三月限） ○ハウスキーパー記念社交館建築着工す。（六月）
昭和三年（一九二八）	文相水野錬太郎、知事牛塚虎太郎以下八名専門部視察、昼餐を共にす。（一月二十七日） ○押川方義永眠（一月十日）仙台北山に建碑式を挙ぐ。（六月八日） ○専門部文・師・商の三科とも予科を廃し、本科四年制に改む。 ○ハウスキーパー記念社交館献堂式を行う。（三月三日）
昭和四年（一九二九）	専門部を「高等学部」と改称。 ○文科の学科課程を歴史科を主として改む。 ○神学部の第二科を廃止、第一科を神学本科と改称し、三ケ年の予科を置く。 ○「財団法人東北学院」を設置。（八月三十一日） ○シュネーダー夫妻渡米（四月二十九日）
昭和五年（一九三〇）	高等学部師範科に専攻科一年を置く。 ○シュネーダー夫妻帰仙。（四月十日） ○ラーハウザー記念礼拝堂建築起工。（十一月）
昭和六年（一九三一）	中学部は剣道を正科課程とした。 ○シュネーダー院長の停年制延長請願を起す。 ○高等学部紛擾事件起る。（七月より十月まで）
昭和七年（一九三二）	高等学部は一学年三学期制を二学期制に改む。 ○ラーハウザー記念礼拝堂献堂式挙行。（三月） ○「労働会寄宿舎」を廃止した。（九月） ○「中学部寄宿舎」を廃止し、神学部寄宿生をその跡に入れた。
昭和八年（一九三三）	文科卒業者に歴史科につき中等教員無試験検定の資格を認可された。（七月） ○高等学部は学生制帽を角帽から円形帽に改め金属製の徽章を金モールの刺繍に改めた。 ○中学部柔道々場を建築した。 ○大正十五年以来創立記念式を十月十五日に行って来たが再び元の五月に返えした。
昭和九年（一九三四）	神学部は南六軒丁、ブラッドショウ館に移る。 ○シュネーダー院長辞表を提出し、理事会は昭和十一年創立五十周年を期して受理に決す。 ○米国ミッション・ボードより九年度補助金四割減を通報、教職員の減俸を行う。（一月） ○創立五十周年記念事業に基本金百万円募集計画を起す。（一月） ○高等学部後援会（父兄会）起る。（七月）
昭和十年（一九三五）	出村悌三郎院長代理。津久井善四郎、高等学部長代理兼商科々長。文科々長高里良恭。師範科々長山川丙三郎各就任。（四月） ○御真影奉戴式を行う。（十一月二十九日）
昭和十一年（一九三六）	高等学部文科を「文科第一部」師範科を「文科第二部」と改称。（三月） ○創立第五十周年記念式を行う。（五月十日） ○出村悌三郎院長就任（三代目） ○シュネーダー旭日中綬章を授与された。（六月） ○シュネーダー夫妻、最後の帰米。（六月十九日） ○野間記念道場落成す。（六月十七日） ○旧労働会の建物及び敷地（東八番丁）を売却す。（十二月十六日）
昭和十二年（一九三七）	○三月限りにて神学部を廃止。 ○高等学部三年制度を設置し、四年制の募集を中止。 ○ザウグ高等学部長就任。 ○中学部旧寄宿舎を教室に改造、両部ともに教室を増設した。 ○島崎藤村夫妻来院（六月十八日） ○上海方面の戦勝、南京陥落（十二月）等の県・市連合主催の提灯行列に参加す（十二月十三日） ○青山学院定期戦（柔道）に大勝す（十一月一日） ○市主催の武運長久祈願式に全校参列、招魂社参拝を行う（十月二十八日） ○「日本基督東北学院教会」を「日本基督宮城教会」と改めた（一月十日）
昭和十三年（一九三八）	五十嵐正中学部長辞任（三月三十一日） ○田口泰輔中学部長就任（四月一日） ○県下中等学校入試問題の筆記法を全廃、口頭試問に改む。 ○シュネーダー名誉院長夫妻帰朝（五月十六日横浜着） ○中学部蹴球部甲子園の全国優勝大会に出場す（八月二十二日） ○御真影を高等学部より中学部にうつす。 ○シュネーダー名誉院長永眠（十月五日） ○武漢三鎮攻略祝賀閲兵式及び提灯行列に全校参加。（十月十八日） ○中学部撃剣道場落成（十一月三日） ○本院出身者戦死合同追悼会を行う（十一月二十日）
昭和十四年（一九三九）	中学部長田口泰輔永眠（三月十二日） ○出村剛中学部長就任（四月一日） ○現役将校学校配属十五周年記念御親閲式を宮城前にて行う（五月二十二日） ○「青少年に賜わりたる勅語」拝受式を行う。（六月二十二日） ○中学部理科教室を増設（九月） ○「興亜奉公日」を設定す（九月）
昭和十五年（一九四〇）	紀元二千六百年記念事業企画を起す（一月二十九日） ○東北学院退職手当支給規定を解消す（四月一日） ○南町通り旧神学部校舎及び敷地を売却す（五月二十日） ○高山海岸に学生修養道場建設のため用地を購入す（七月） ○聖書教育に関し官憲の干渉始まる（八月） ○全国基督教会合同を宣言す（十月十七日） ○紀元二千六百年記念軍県合同特別観兵式を宮城原に行い全校参加した（十月二十一日） ○「東北学院維持会」を組織す（十一月）
昭和十六年（一九四一）	○出村剛高等学部長就任（四月一日） ○小泉要太郎中学部長就任（四月一日） ○高等学部文科生徒募集停止（四月） ○学院経営の独立自営断行（四月） ○同窓会長鮮満地の同窓生訪問旅行を行う（五月） ○ミセス・シュネーダー永眠（六月二十四日） ○大学・高専校は卒業を六ヵ月短縮繰上げた。
昭和十七年（一九四二）	高等学部商科第二部及び中学部第二部設置（四月一日） ○中学部・高等学部の卒業年限をそれぞれ四年・二年に短縮す（八月） ○高等学部文科を廃止す（九月） ○高等学部と中学部の父兄会及び同窓会の三者合同により、三校祖の肖像画製作の企画を起す。
昭和十八年（一九四三）	高等学部商科を「高等商業部」と改称（四月一日） ○「東北学院中学部」を「同中学校」と改称（四月一日） ○出村悌三郎院長中学校長を兼任し、津田郁副校長となる。 ○小泉要太郎中学部長辞任（三月限） ○基督教団神学校として日本東部、同西部及び日本女子の三神学校を設置（三月三十一日）同二十四年三神校を合併して「東京神学大学」を設置した。
昭和十九年（一九四四）	「東北学院航空工業専門学校」を設置す（四月一日） ○宮城音五郎同校長就任（四月一日）
昭和二十年（一九四五）	出村悌三郎院長並に中学校長辞任（三月限） ○津田郁中学校副校長辞任（三月限） ○出村剛中学校長就任（四月一日） ○仙台空襲を被る本学院損害甚大（七月十日） ○高等商業部並に同二部廃止（八月限） ○終戦の詔書下る（八月十五日） ○宗教団体法廃止（十二月） ○文部省訓令第八号公布（私立学校の宗教々育を認可）（十月十五日） ○本院航空専門学校を「同工業専門学校」に改む（十二月） ○御真影を奉還す（十二月）

―東北学院七十年史より転載―

（つづく）